

中国の対アフリカ直接投資が貿易に与える効果の検証（2003－2010年）
－直接投資は中国の輸出拡大および石油資源獲得に結びついているか－

尹曼琳（金沢大学大学院人間社会環境研究科）

E-mail: yinmanlin2008107@yahoo.co.jp

近年、中国の対アフリカ進出に関心があつまっている。中国のアフリカ進出の背景には、中国の新興市場確保、輸出拡大、天然資源獲得、先進国市場での貿易障壁の回避といった中国側の思惑があることが指摘されている。このうち、本稿では、中国の輸出拡大および天然資源の獲得という動機に焦点を当て、まず、中国の対アフリカ直接投資が中国のアフリカとの貿易（輸出・輸入）に与える影響を分析し、続いて、中国のアフリカ石油開発国への直接投資が中国の輸入に与える影響は非石油開発国と比べてどの程度の差異があるのかという視点から、間接的に中国の対アフリカ直接投資が石油資源獲得に結びついているかどうかを検証した。間接的というのは、本来ならば、産業ごとの直接投資データを手し、石油開発に関する直接投資額と石油輸入の関係から検証すべきであるが、中国政府が産業ごとの統計を公表していないため、直接的にこうした検証を行うことができないからである。具体的には、アフリカ 43 カ国を対象に、2003 年から 2010 年までの 8 年間について、中国からアフリカ各国への輸出額とアフリカ各国から中国への輸入額を被説明変数に、中国の対外直接投資ストック、中国とアフリカ諸国それぞれの GDP の相乗、同一人当たり GDP の相乗、中国の首都からアフリカ各国首都までの距離、アフリカ各国が中国の石油開発国か否かを示すダミー変数、直接投資と石油開発国の交差項ダミー変数、コントロール変数としての年ダミー変数を説明変数に入れたパネルデータを用いたグラビティモデルを構築して、一般化最小二乗法の手法で分析している。すでに、類似の先行研究は存在するが、本稿のオリジナリティは、石油開発国ダミーを入れる際に、中国がアフリカで石油開発を行っている 16 カ国を石油開発国と定義していること、また、中国政府の直接投資データの集計方法が 2007 年から変化していることを踏まえて、2003－2006 年、2007－2010 年の 2 期にわけて分析している点になる。

結論としては、先行研究の結果と異なり、2003－2010 年の期間を通じて、中国のアフリカへの直接投資は中国のアフリカへの輸出拡大に結びついていないことが明らかとなった。対して輸入については、先行研究と同様に、2003－2010 年の期間を通じて、中国のアフリカへの直接投資がアフリカからの輸入を増やしたことが示されたが、2003－2006 年期間については、中国のアフリカへの直接投資がアフリカからの輸入を増やす効果は石油開発国であるか否かで変わらないのに対して、2007－2010 年期間については、中国のアフリカ石油開発国からの輸入は非石油開発国より多く、中国の石油開発国への直接投資がそれらの国からの輸入を相対的に増やすことも明らかとなった。これら石油開発国 16 カ国のうち、少なくとも、中国は、アンゴラ、スーダン、リビア、チャド、コンゴ、ナイジェリア、アルジェリア、赤道ギニア、ガボンの 9 カ国からは石油資源を輸入している。したがって、これらの国への直接投資は、中国の石油資源獲得に結びついていると判断できる。対して、2003－2006 期間にそのような効果が観察されなかったのは、開発権の取得から実際に原油を手にするまで油田開発に関する生産分与契約、油田の探査および技術評価作業、油田権益の買収、油田の開発、石油パイプライン建設といった一連の手順が必要であり、相応の時間を要するからと考えられる。